

てほめけるが、其名をいふ人なかりしを、今年まで四十年、其人をえらざりしに、今年の晩春、幽篁庵の席上、話此事におよび、おのれが見たる所を語りしに、見たるとハ、はしのおちし時、御主人松五之助曰、一刀をふりしは南町奉行組同心、渡邊小右衛門と云ひし半老の人なりと聞きて、其時にあひて四十年えらざりしを發明して耳を新にせり、此人なくんば、なほいく人か溺死せん無量の善根といふべし。

〔花月草紙六〕深川の八幡のやしろのまつりある日、おほくの人みにいきけり、二つ三つばかりの子をいだきて、母の行きたるが、大なるはしあり、わたらんとすれば、その子のひたなきになきてやまず、橋をわたらじとかへればなきやみつ、いかにえつることよとて、さまん一にすれどはじめにかはらず、まづさらばこゝらにいこふべしとて、はしのかたはらにゐたるが、えばし、てはし一のうへのひとさわぎたちて、聲のかぎりによびつ、あわてふためきにげまどふ、いかなること、もわかずよくきけば、そのはしの半よりおちて、わたりか、りし人千人許もおちしとなり、それをきくよりの母も、おほえずなみだおちてけり、いかにしてこの子のえりつらん、神佛のたすけ給ひしなりとて、ふしをがみつ、いそぎかへりにけり、その子のみかはその母もえりたれども、たゞ私の心におほはれて、てらし得ぬなりけり、もとよりそのわざはひにあふものは、おもてにもあふれて、そのあしき色をあらはすべければ、心のかゞみははやてらしけんをえらざりしなり。

〔武江年表十〕安政三年八月廿三日、微雨、廿四日廿五日續て微雨、廿五日暮て次第に降えきり、南風烈しく戌の下刻より殊に甚しく、近來稀なる大風雨にて、略中 永代橋大船流當りて、半ば崩れたり、

〔夫木和歌抄二十一〕まゝ、のつぎはし 下總。又近江、上總。